

富山県庄川町

埋蔵文化財分布調査報告

2004年

庄川町教育委員会

序

庄川町は富山県の南西部・砺波平野の南東に位置し、町の南東部には、牛嶽・鉢伏山・高尾山など標高400～1,000mの山々が連なり、大正末期から昭和初期にかけ、豊富な庄川の水量を利用して電源開発事業が進められ、昭和5年に当時東洋一を誇った「小牧ダム」の完成により、電源開発の拠点・用水の要として現在に至り、水と緑の町として発展を続けております。

平成14年度から3年計画で、開発行為との事前調整に役立てる為、庄川町全域における詳細分布調査を実施し、この成果をここに一冊の報告書として取りまとめました。本書がより多くの方々に活用され、文化財保護の一助となれば幸いです。

終わりに、本分布調査で協力いただいた地元住民の方々をはじめ、関係機関へ深く感謝申し上げます。

2004年9月

富山県庄川町教育委員会

例　　言

- 1 本書は庄川町教育委員会が平成14・15年度の2年間、文化庁の国庫補助を受けて実施した町内遺跡詳細調査報告である。
- 2 調査は庄川町教育委員会が事業主体となり実施した。
- 3 年度ごとの調査地区は次のとおりである。

平成14年度	青島・種田・東山見平野部
平成15年度	東山見山間部・雄神
- 4 現地調査にあたっては各地区の多大なる協力を得た。現地調査は次の方々にお願いした。(敬称略)

平成14年度	調査員 河野典夫・坂田雅人・床平慎介
	調査助手 川合美明
平成15年度	調査員 大嵩崎泰明
	調査助手 川合美明
- 5 資料の整理、本書の編集と執筆は平成15年度調査員 大嵩崎泰明が担当した。
- 6 調査期間中及び本書編集にあたっては、関係機関及び下記の方々に有意義な助言を頂いた。記して深く感謝したい。

富山県教育委員会文化財課、富山県埋蔵文化財センター、藤田富士夫、久々忠義、往藏久雄、尾田武雄、古谷渉、利波匡裕、野原大輔
- 7 採集遺物及び記録図面は、庄川町教育委員会教務課で保存管理している。

目　　次

I 位置と環境	1
1 調査の目的と方法	1
2 年度別調査区割	1
3 調査組織	1
II 調査の概要	4
1 各調査区の概要及び採集遺物	4
2 まとめ	14
引用・参考文献	14

図目次

第1図 庄川町位置図	1
第2図 年度別区割図	2
第3図 地区割図	3
第4-1図 遺物採集地点詳細図1	15, 16
第4-2図 遺物採集地点詳細図2	17, 18
第4-3図 遺物採集地点詳細図3	19, 20
第4-4図 遺物採集地点詳細図4	21, 22
第5-1図 時代別採集地点図(縄文時代)	23, 24
第5-2図 時代別採集地点図(古代)	25, 26
第5-3図 時代別採集地点図(中世)	27, 28
第5-4図 時代別採集地点図(近世以降)	29, 30

I 位置と環境

地勢 庄川町は富山県の南西部・砺波平野の南東に位置し、町の南東部には牛嶺・鉢伏・高尾山など標高400~1,000mの山々が連なり、西北部には標高50~150mの砺波平野が広がる。東は山田村、西は井波町、南は利賀村、北は砺波市に各々隣接し、東西6.5km、南北9.3km、総面積30.77km²で町の中央を一級河川「庄川」が貫流している。岐阜県烏帽子岳に源を発する庄川は、飛騨・五箇山の山間部を縫うように流れ、庄川町地内で初めて平野部に流れ出、ほぼ富山県西部全域を灌漑している。

庄川と並行して走る国道156号は、北陸自動車道の砺波インターチェンジや高岡駅へのアクセス道路として重要な役割を果たしており、国道471号や県道も市街地を頂点とした放射状に整備され、近隣市町に通じている。

自然 県西部全域を灌漑する農業用水のほとんどが、町内で一級河川庄川より取水し、放射状に流れ出ているため、町土の約10%が河川・水路で占められている。町土の約45%の平地は、昔から庄川の洪水の度に河道が変わった氾濫原であり、河岸段丘と新しい扇状地からなっているため、町内の至る所に段丘が見られる。約55%の山地は、庄川右岸から切り立った砺波嵐山や牛嶺・鉢伏山・三条山の標高400~1,000mの山々が砺波平野の屏風のように連なっている。

気候は、冬は寒く春にかけて気温が上昇し、梅雨が過ぎるとやがて雨の少ない夏が来る。典型的な日本海式気候である。

産業 最近の農業センサス統計調査によると、兼業農家率が96.6%と非常に割合が高く、1農家当たりの経営耕地面積は0.82haと他自治体と比べると少ない状況である。

庄川町特有の南風(通称「庄川嵐」)が吹き降ろす種田・青島地域の散居集落は古くから地域の特性を活かして水稻種子の生産地として有名で、年間約2,000tと全国一の生産量を誇っている。



第1図 庄川町位置図

1 調査の目的と方法

本分布調査以前まで、庄川町における埋蔵文化財包蔵地は17箇所あった。しかし、これらの包蔵地は古い伝承によるものや、開発行為によって発見されたものが大部分であり、これまでに系統だった分布調査は行われていない。ことにより、埋蔵文化財の保護と活用、開発行為との調整を目的に、町全域を対象とする詳細な埋蔵文化財の分布調査を実施し、遺跡台帳を充実させることとした。

調査は、庄川町教育委員会が主体となり、国庫補助を受け、期間的に臨時調査員等を雇用し調査にあたった。町内を4エリアに分割し、平成14年度から平成16年度までの3年間の予定で調査を行うこととした。

2 年度別調査区割

平成14年度	青島地区・種田地区・東山見平野部
平成15年度	東山見山間部・雄神地区・補足調査
平成16年度	報告書発刊

3 調査組織

調査主体 庄川町教育委員会 調査事務局 庄川町教育委員会教務課内

役職 年度	教育長	課長	課長代理	主任	調査員(臨時雇用)
平成14年度	田上 弘	中島英夫	野村勇洋	源田 孝	坂田雅人・床平慎介
平成15・16年度	田上 弘	北村 篤	野村勇洋	源田 孝	大嵩崎泰明・坂田雅人



第2図 年度別区割図 (S=1:40,000)



第3図 地区割図 (S=1:40,000)

II 調査の概要

採集地点番号は第4図を参照のこと
遺跡番号は『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』を基にした

1 各調査区の概要及び採集遺物

(1) 第1～3地区 (古上野および一部高儀新地内)

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は76～81mを測る。旧千保川河道の西側にあたり、地表面はその作用を受けているが、中央の出町往来の道筋付近はmud（マッド）と呼ばれる微高地となっている。

第3地区 007 地点で寛永通宝を一点、008 地点で古伊万里のとっくり底部を一点採集する。

第3地区の採集地点付近はかつて太子伝道たいしどんみちという井波瑞泉寺への参詣道が南北に通っていたとの記録があり、その道筋との関連が推測される。

(2) 第4～6・8～9地区 (天正・筏および一部五ヶ・青島地内)

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は81～89mを測る。旧野尻川河道にあたり、地表面はその作用を受けている。西側の二万石用水に沿って第3段丘（示野段丘）面との段差地形が確認でき、旧野尻川の西限と推定される。

第4地区 010 地点で古伊万里の碗底部を一点採集する。第5地区 011 地点で唐津の塊を一片、013 地点で中世土師器の底部を一点、014 地点で古伊万里を一片、唐津の壺を一片採集する。013 地点の中世土師器底部には回転糸きり痕が残る。第8地区 019 地点で寛永通宝を一点、020 地点で古伊万里の皿底部を一点採集する。第9地区 021 地点で古伊万里の碗を二片、022 地点で宝筐印塔ほうきょういんとうの法輪と思われる石造物を一点採集する。

(3) 第7・11地区 (高儀新および一部古上野・五ヶ地内)

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は81～92mを測る。旧千保川河道の西側にあたり、地表面はその作用を受けているが、西側の出町往来の道筋付近はmud（マッド）と呼ばれる微高地となっている。

第7地区 015 地点で中世土師器を一片採集する。第11地区 031 地点で中世土師器の口縁部を一点、唐津の塊底部を一点、032 地点で土師器を一片、033 地点で珠洲焼の擂鉢を一片、唐津の皿底部を一点、古伊万里の碗を三片、034 地点で古伊万里の碗底部を一点採集する。

第7・11地区は第3地区の南側にあたり、採集地点と太子伝道との関連が推測される。

(4) 第10・14～15地区 (五ヶおよび一部天正・高儀新・青島地内)

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は86～96mを測る。旧千保川河道の西側および旧野尻川河道にあたり、地表面はその作用を受けているが、中央の出町往来の道筋付近と西側の青島勧帰寺付近はmud（マッド）と呼ばれる微高地となっている。

第10地区 025 地点で古伊万里の碗を二片、027 地点で越中瀬戸焼の皿口辺部を一点、唐津を一片採集する。第14地区 044 地点で唐津の塊口辺部を一点、045 地点で古伊万里の碗口辺部を一点、047 地点で古伊万里のとっくり一片、048 地点で瀬戸美濃の底部一点と破片を一片、049 地点で唐津を一片、051 地点で越前焼の擂鉢を一片、052 地点で瀬戸美濃の塊を一片採集する。048 地点の瀬戸美濃底部には右回転糸きり痕が残る。

第14地区的中央には東西に元雄神神社（弁財天）への参拝道であった弁才天道が通っていたとの記録があり、付近には樹齢430年と口伝される杉の大木も立っている。045～048・052 地点の採集遺物との関連が推測される。

(5) 第12・17地区 (示野地内北側)

庄川河岸段丘第3段丘（示野段丘）面に位置し、標高は92～101mを測る。地表面は砂礫が覆っている。

第 12 地区 035 地点で土師器の口辺部を一点、唐津の塊口辺部を一点、古伊万里を三片、036 地点で古伊万里の碗口辺部を一点、037 地点で青磁の底部を一点採集する。第 17 地区 067 地点で土師器を一片、068 地点で縄文土器の深鉢片を二片、071 地点で唐津の塊底部を一点、072 地点で古伊万里の底部を一点採集する。

(6) 第 13・18~19 地区（青島地内北西側および一部天正・五ヶ地内）

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は 89~97m を測る。旧野尻川河道にあたり、地表面はその作用を受けている。

第 13 地区 038 地点で古伊万里の碗口辺部を一点、040 地点で唐津の塊を一片採集する。第 18 地区 079 地点で古伊万里を一片採集する。第 19 地区 080 地点で古伊万里を一片、083 地点で唐津の塊を一片採集する。

弁財天道が青島勧帰寺北側を通っていたとの記録があり、その道筋と 039~043 地点の採集遺物との関連が推測される。

(7) 第 16 地区（示野地内南西側）

庄川河岸段丘第 3 段丘（示野段丘）面に位置し、南側の一部域が第 2 段丘（金屋段丘）面にかかる。標高は 95 ~105m を測る。地表面は砂礫が覆っている。

14 年度調査 054 地点で古伊万里の底部を一点、057 地点で須恵器の横瓶を一片、058 地点で玦状耳飾を一点、059 地点で須恵器の瓶または壺を一片、060 地点で土師質土器の皿口辺部を一点、062 地点で土師器の底部を一点、063 地点で土師器の口辺部を一点採集する。また 15 年度補足調査 149 地点で古伊万里の鉢口辺部を一点、150 地点で土師器の底部を一点採集する。

058 地点の玦状耳飾は、富山県埋蔵文化財センター所長藤田富士夫氏より、蛇紋岩製で型式から縄文時代前期後葉の蜆ヶ森 II 式期のものと考えられるとの見解をいただいた。

057 地点の須恵器は外面は灰色、内面に灰オリーブ色の自然釉が付着し、胎土は砂粒が多く混入している。外面平行タタキ、内面同心円文が施されている。059 地点の須恵器は内外面灰色、胎土は細かく混入物は少ない。外面は平行タタキ、内面カキ目が施されている。ふたつの須恵器は別の窯で焼かれたものだと思われる。

060 地点の土師質土器は内面と口縁部に暗赤褐色の彩色が施され、胎土は密である。内外面横なで調整を受けている。062 地点の土師器は外面赤橙色、内面にぶい黄色、胎土は密である。磨耗がはげしい。063 地点の土師器は内外面橙色、胎土は密で、有段口縁である。

採集地点は第 2 段丘端部から南西側半径 100m 以内に集中している。この区域にて縄文時代前期から近世までの遺物が採集されたが、縄文時代前期の遺跡は周辺に周知されていない上、玦状耳飾一点のみの採集のため判断がつかない。須恵器と土師器に関しては西側 200m の井波町内に犬藪遺跡（窯跡 平安時代）が周知されており、関連が推測される。

(8) 第 20・22~23 地区（青島地内南東側および一部金屋地内）

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は 97~105m を測る。地表面は、近世に庄川左岸に松川除が築堤され、庄川の川筋が現在の流路に固定されるまでは、旧千保川、新又中村川、野尻川等の分流元であったため、東側の庄川筋に向かうにしたがい礫の分布が密になる。また調査区は庄川町の中心市街地とほぼ重なるため、住宅・工場開発の作用を強く受けている。

第 20 地区 085 地点で古伊万里を二片、086 地点で古伊万里を二片、唐津の塊底部を一点、091 地点で瀬戸美濃を一片、092 地点で素焼き瓦を採集する。第 23 地区 145 地点で古伊万里を一片、146 地点で土師器を一片、148 地点で縄文土器を一片、149 地点で土師器を一片、150 地点で縄文土器を一片、151 地点で縄文土器片を多数、152 地点で瀬戸美濃の口辺部を一点採集する。

151 地点の縄文土器片は区画整理の際に客土と共に搬入されたことが判明している。ただし搬入元は不明であ

る。

(9) 第21地区（示野地内南東側および一部金屋地内）

庄川河岸段丘第3段丘（示野段丘）面に位置し、標高は99～106mを測る。地表面は砂礫が覆っている。東側は中心市街地に繋がる住宅地になっており、住宅開発による作用を受けている。

調査区中央に周知の遺跡、松原遺跡〔遺跡番号405005〕が広がる。これまで本調査が昭和43、49、平成7、10年度の計4回、試掘調査が昭和48年度の計1回実施され、縄文土器・打製・磨製石斧・磨石・凹石・石棒・石錐等を伴う縄文中期の遺跡であることが判明している。

今回の踏査では国道156号線と第3段丘際に挟まれた南北300m東西400mの範囲内の計40地点で縄文土器を採集する。1～3cm程度の細片が多いため、文様の識別が可能なものを中心に記載する。

遺跡推定地の北側、093・094地点で縄文土器片を多数採集する。095地点で須恵器を一片、096地点で唐津を一片採集する。

遺跡推定地内、102地点で格子文の施された深鉢口辺部を一点と他多数、104地点で櫛状具刺突文を二条の沈線で切った浅鉢口辺部を一点と他多数、105地点で渦巻文の施された破片を二片と他多数、106地点で櫛状具刺突文の施された破片を一片、土師器を一片と他多数、108地点で縄文の施された深鉢片を二片と他多数、119地点で上山田・天神山式深鉢口辺部を一点、隆帶文に篦刻みが入った破片を一片、撫糸圧痕文の施された破片を一片と他多数、122地点で半裁竹管で引かれた沈線が三条施された口辺部を一点、渦巻文の施された破片を一片と他多数、125地点で区画文の施された深鉢片を一片、隆帶文に篦刻みが入った破片を一片、石錐を一点と他多数、129地点で黒色土器片を二片、斜格子文の施された破片を一片、半隆起線文の施された破片を一片、結節縄文の施された破片を一片と他多数、130地点で撫糸圧痕文の施された破片を一片、深鉢の底部を一点、土師器の口辺部を一点と他多数、131地点で土製品の破片を一片、中世土師器を二片と他多数、134地点で深鉢の底部を一点、打製石斧片を一点と他多数、135地点で墨書き土器片を二片と他多数、138地点で渦巻文の施された破片を一片、隆帶文に篦刻みが入った破片を一片、半裁竹管で太い沈線が二条引かれた破片を一片と他多数、140地点で黒色土器片を一片と縄文土器片を一片、141地点で撫糸圧痕文の施された破片を一片、土師器を一片と他多数を採集する。

遺跡推定地の東側、110地点で縄文土器片を複数、珠洲焼を一片、瀬戸美濃の擂鉢を一片、112地点で縄文土器片を複数、打製石斧を一点、須恵器を一片、中世土師器底部を二点、古伊万里を三片採集する。また111～116・118地点では縄文土器と中世土師器を共に採集する。112地点の須恵器は内外面灰色、胎土は密で混入物は少ない。外面はカキ目が施され、内面は横なで調整がなされている。中世土師器は内外面黄橙色、胎土は荒く、礫粒・砂粒を含む。外面は横なで、内面は篦跡だろうか4段の筋が残る。底部は篦削りである。

遺跡推定地外、国道156号線南側第2段丘（金屋段丘）直下に遺物集中地がもう一ヶ所認められる。

14年度調査097地点で土師器片を複数、099地点で土師器片を複数、100地点で土師器片を複数、101地点で須恵器を三片、珠洲焼を一片、越前焼を一片、土師器片を複数採集する。また15年度補足調査151地点で土師器を一片、152地点で中世土師器を一片、153地点で土師器を二片、154地点で土製品片を一片、155地点で中世土師器を二片、瀬戸美濃を一片、159地点で縄文土器を一片、163地点で古伊万里の碗を一片、166地点で土師器を一片採集する。

松原遺跡推定地から採集された縄文土器は以前の発掘調査で出土したものと同様に中期前葉新崎式～中期中葉上山田・天神山式の特徴をもつ。125・129地点、138地点にて著しい量の土器を採集し、この付近に遺跡の中心地が存在することを思わせる。このポイントは昭和48年度の試掘調査の際に設定された第1～3地点の内、前者は第3地点、後者は第1地点にほぼ重なる。今回の踏査では推定地北側と東側からもまとまった量の遺物が

採集された。北側は大正2年の砺波鉄道（旧加越線）敷設工事の際に初めて遺跡が確認された箇所であるが、その敷設工事、その後の道路・住宅整備等によって現在遺跡は失われたと推測する。一方東側からは縄文土器と共に中世土器が採集された。この区域では中世土器の採集量が縄文土器のそれより多かった。ただ現況が住宅地となっているため、範囲等の実態は不明である。

国道156号線南側、第2段丘際は北側とまた様相が異なる。中世土器が遺物の中心であり、縄文土器はほとんど採集できない。第2段丘際に沿って東南方向に向かうほど分布密度が密になり、第25調査区内に続いている。

以上松原遺跡推定地内に二ヶ所、中世土器を中心とする東側、南側の計4ヶ所に遺物集中地を確認した。

(10) 第24地区（金屋地内西側および一部示野地内）

庄川河岸段丘第2段丘（金屋段丘）面に位置し、標高は105～126mを測る。地表面は砂礫が覆っているが、場所によっては腐植洪積土が1m近く堆積している場所もある。

調査区中央に周知の遺跡、金屋ポンポン野遺跡〔遺跡番号405006〕が広がる。昭和初期の耕地整理事業以前には多くの土器・石器が出土したと伝えられる。縄文時代中期の遺跡とされる。

今回の踏査では計26地点で縄文土器を採集するが、遺跡推定地内では1地点のみであった。縄文土器採集地点は遺跡推定地北側に弧状に分布する。採集土器は1cm未満の細片が多いため、文様の識別ができない。他の遺物が伴った地点のみを記載する。

155地点で越中瀬戸焼の擂鉢底部を一点、160地点で縄文土器片を二片、土師器を一片、162地点で中世土師器底部を一点、唐津を一片、166地点で縄文土器片を一片、土師器を三片、169地点で縄文土器片を一片、土師器を一片、170地点で縄文土器片を一片、磨製石斧を一点、171地点で縄文土器片を一片、土師器を一片、172地点で縄文土器片を一片、瀬戸美濃を一片、175地点で縄文土器片を二片、土師器を一片、179地点で縄文土器片を三片、土師器片を多数、208地点で縄文土器片を三片、土師器を二片採集する。

遺跡推定地を含む中央～南側からは中世土器が採集された。この区域では計15地点で土師器を採集する。

181地点で土師器を一片、越中瀬戸を一片、古伊万里を一片、186地点で珠洲焼を一片、越前焼底部を一点、古伊万里の碗底部を一点、188地点で越中瀬戸焼を一片、189地点で八尾焼底部を一点、素焼き瓦を一点、190地点で中世土師器を二十一片、191地点で中世土師器を九片、194地点で青磁口辺部を一点、195地点で唐津を一片、197地点で中世土師器片を多数、須恵器底部を一点、瀬戸美濃を一片、越中瀬戸底部を一点、唐津を一片、198地点で中世土師器を十二片、199地点で中世土師器を十七片、須恵器を一片、須恵器系陶器底部を一点、200地点で中世土師器を二十片、202地点で縄文土器を二片、須恵器を一片、中世土師器を二片、瀬戸美濃を一片採集する。189地点の八尾焼底部は削りだし高台である。197地点の須恵器底部は内外面灰白色、胎土は密で砂粒が少し入る。籠削り高台で外面に籠先でつけたX字が残る。越中瀬戸底部は削りだし高台である。199地点の須恵器系陶器底部は削りだし高台である。

金屋ポンポン野遺跡推定地からは遺物がほとんど採集できなかった。推定地北側で遺物が採集されたため、遺跡指定の位置がずれている、あるいは微細片が目立つことより、耕地整理の際に搅乱を受けた等の理由が考えられる。いずれにしろ現在遺跡は失われたと推測する。

第27地区との境界線とした道は通称岩黒道といい、古代は越中国司であった大伴家持が、近世になっては幕府の巡見上史が視察の際に通過したといわれる重要幹線であった。188・189地点の採集遺物との関連が推定される。また第27地区側には金屋岩黒館と呼ばれる城館があったという伝承や本願寺第五世綽如が布教の際に休息したという町指定史跡名勝、瓜裂清水があり、古くからこの付近が開けていたことを思わせる。今回の踏査では197地点を中心として中世土器が採集されたが、かつてこの付近を館道と呼ばれる道が岩黒道から南北方向に延びていたという記録があり、関連を推測させる。

(11)第 25 地区（金屋地内北側および一部示野地内）

庄川河岸段丘第 2 段丘（金屋段丘）面に位置し、北側の一部域が第 3 段丘（示野段丘）面にかかる。標高は 105 ~ 126m を測る。地表面は砂礫が覆っているが、場所によっては腐植洪積土が 1 m 近く堆積している場所もある。

調査区北側第 3 段丘面は、第 21 地区から遺物分布密度が高い帯が続いており、国道 471 号線にかぎ字に囲まれた区域で最も密となる。14 年度調査 211 地点で中世土師器を七片、越中瀬戸焼を一片、213 地点で土師器片を多数、中世土師器を八片、砥石を一点、216 地点で縄文土器を多数、瀬戸美濃底部を一点、越前焼を一片、234 地点で縄文土器を多数採集する。15 年度補足調査では 169 地点で古伊万里を一片、175 地点で青磁を一片、176 地点で縄文土器片を多数、中世土師器を二片、178 地点で土師器を四片、179 地点で縄文土器を五片、石錘を一点、180 地点で土師器口縁部を一点、181 地点で珠洲焼を一片採集する。

第 24 地区の中世土器集中採集地に隣接した調査区西側では 217・218・224・225・235・238 地点で土師器を採集する。また 224 地点で寛永通宝を一点採集する。

調査区東側に遺物集中地がもう一ヶ所認められる。227 地点で須恵器を四片、中世土師器を十一片、228 地点で須恵器片を一片、229 地点で中世土師器底部二点、口辺部一点を含む土師器片を多数、唐津を二片、230 地点で中世土師器口縁部を一点、破片を一片、236 地点で須恵器の擂鉢口辺部を一点、土師器を二片、239 地点で中世土師器底部を一点、唐津の塊底部を一点、240 地点で中世土師器底部を一点、土師器片を二片、珠洲焼を一片採集する。

調査区北側、第 3 段丘面では縄文時代から近世までの遺物を採集した。14 年度調査 216・234 地点、15 年度補足調査 176・177 地点で土器片を集中採集したが、時期を特定できるもののがなく、北側 200m の位置にある松原遺跡との関連は不明である。

第 2 段丘面西側の遺物集中地は採集量が少ないため、中心は第 24 地区側にあると推測する。

東側の遺物集中地では 227・229・231 地点に集中採集点を認める。付近で石仏が出土したという聞き取りもあり、宗教遺跡の存在を推測させる。

(12)第 26 地区（金屋地内東側）

庄川河岸段丘第 2 段丘（金屋段丘）面に位置し、南西側が第 1 段丘（閑乗寺段丘）面に展開する。南東側は庄川に沿って狭い平坦地となる。標高は 105~160m を測る。地表面も三様に、砂礫が目立つ第 2 段丘面、安山岩質の角礫が目立つ第 1 段丘面、こぶし大の円礫が目立つ平坦面と分かれる。

245 地点で古伊万里を一片、唐津を一片、248 地点で土師器を一片、249 地点で縄文土器を二片、250 地点で土師器を一片採集する。15 年度補足調査 186 地点で古伊万里の鉢底部を三点、188 地点で古伊万里の碗底部を一点採集する。

調査区中央の宇京坂、了安付近からは以前土器・石器が出土したという。また京坂は経坂が変化したものであり、了安は金屋西蓮寺の旧地であるといい、宗教遺跡の存在をおわせるが遺物を採集することはできなかった。

(13)第 27 地区（金屋地内南側）

調査区の大部分が高清水山地東端の丘陵地に位置し、北側が第 1 段丘（閑乗寺段丘）面に展開する。標高は 118~278m を測る。地表面は礫層の上に、厚く腐植洪積土が堆積している。

14 年度調査 252 地点で縄文土器を十五片、253 地点で縄文土器を一片、257 地点で縄文土器を一片、258 地点で横に三条の沈線が入った縄文土器口辺部を一点、隆帶文に爪形の刻みが入った縄文土器片を一片、260 地点で縄文土器を一片、261 地点で墨書き土器を一片採集する。15 年度補足調査 191 地点で縄文土器片を一片、194 地点で縄文土器片を一片、198 地点で縄文土器片を二片、199 地点で縄文土器片を一片、200 地点で古伊万里の碗底部を一点、201 地点で縄文土器片を一片採集する。

採集した縄文土器は文様が識別できるものは少ないが、中期中葉上山田・天神山式の特徴をもつように見受けられる。周辺には北西側 900m の河岸段丘面に松原遺跡、西側 800m の河岸段丘面に金屋ポンポン野遺跡、南側 350m の井波町地内丘陵地に閑乗寺遺跡と縄文時代中期の遺跡が点在している。

また調査区東側、青山墓地最上段で五輪塔空風輪を一点確認する。付近には町指定史跡の金屋神明宮跡があり、かつて金剛坊という寺坊があったという伝承もある。しかし関連を思わせる遺物はほとんど採集できなかった。

(14) 第 28~32 地区（前山地内）

高清水山地東端の丘陵地に位置し、中央を下る尾谷川に向かって傾斜している。標高は 220~320m を測る。地表面は表土が薄く、流紋岩質の円礫が目立つ。

前山はかつて杉谷といい（天正年間に改名）、本願寺五世綽如が井波瑞泉寺を建立する前に草庵を立てた地であると伝わるが、関連を思わせる遺物は採集できなかった。

(15) 第 33~38 地区（小牧地内）

庄川左岸河岸段丘面に位置する。標高は 110m~200m を測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

第 37 地区 010 地点で丸山焼の油壺を一片、011 地点で古伊万里を一片、014 地点で瀬戸美濃を一片採集する。

(16) 第 39~46 地区（湯山地内）

庄川右岸河岸段丘面に位置する。標高は 125m~200m を測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

第 45 地区を中心に周知の遺跡、湯山堂本遺跡〔遺跡番号 405015〕が広がる。平成 13 年度に試掘調査が実施され、その際に須恵器が一点、珠洲焼が一点出土している。中世の遺跡とされる。

022 地点で古伊万里を一片、023 地点で古伊万里の皿底部を一点採集する。

湯山集落にはかつて梅原山以遠寺（福光町）が一向一揆の兵乱後の混乱を避けるため、堂宇を建てていた時期があったという。移転してきた時期は不明だが、延宝五年（1677）に湯山から旧地の福光町梅原に戻った。集落内には堂本という小字も残っている。

(17) 第 47~52 地区（落し地内）

庄川町最高峰牛岳北側、低山性丘陵地間の急峻な谷間に位置する。中央に谷内川が流れる。標高は 125m~260m を測る。地表面は崩積土で覆われている。

第 47 地区 025 地点で古伊万里を一点、026 地点で瀬戸美濃の火入口辺部を一点、第 48 地区 029 地点で砥石を一点、第 52 地区で古伊万里を一片採集する。

(18) 第 53~55 地区（横住地内）

庄川町最高峰牛岳北側、低山性丘陵地の台地に位置する。標高は 220~375m を測る。地表面は崩積土で覆われている。

第 53 地区 033 地区で石造物を一点採集する。

(19) 第 56~57 地区（名ヶ原地内）

庄川町最高峰牛岳北側、低山性丘陵地の台地に位置する。標高は 160~278m を測る。地表面は崩積土で覆われている。

第 57 地区 034 地点で珠洲焼の壺を一片、035 地点で古伊万里を二片、036 地点で越中瀬戸の皿底部を一点、古伊万里を一片、037 地点で古伊万里の碗を二片、038 地点で古伊万里を一片、唐津の碗を一片、039 地点で唐津の碗底部を一点、040 地点で瀬戸美濃の擂鉢を一片採集する。

名ヶ原集落には山田山光教寺（井波町）が一向一揆の兵乱後の混乱を避け、庄川沿岸を流転した際、一時仮堂

を建てていたという。移転してきた時期は不明だが、寛永初年（1624）に庄の現在雄神神社となっている地に堂宇を再建した。採集地点付近の小字を中寺という。

(20) 第 58～60 地区（かくりょう隠尾地内および一部庄地内）

庄川町最高峰牛岳北側、低山性丘陵地に位置する。標高は 205～510m を測る。地表面は丘陵部は泥岩で形成されるが、集落周辺は崩積土で覆われている。

第 60 地区隠尾集落内に周知の遺跡、隠尾城跡〔遺跡番号 405007〕があり、また鉢伏山山頂付近には鉢伏山城跡〔遺跡番号 405012〕と鉢伏山遺跡〔遺跡番号 405014〕がある。

室町時代の城館跡である隠尾城跡は、南北朝期に足利直義に仕えた南部次郎左衛門宗治が、観応二年（1351）直義が滅びた後に越中に逃れ、砺波郡と婦負郡を結ぶ間道の要衝である隠尾に館を築いた。その後永禄三年（1560）上杉謙信が越中に進軍した際の神保氏との戦火に巻き込まれ、城主源左衛門尚吉は館に火を放ち、討ち死にしたという。付近の 042 地点で平戸焼のとっくりを一片、043 地点で茶臼片を一片採集する。

鉢伏山城跡は、隠尾城の詰城と考えられ、以前放牧場を開墾した際に土饅頭など無数の塚が発見されたという。平成 2 年に富山県考古学会副会長の西井龍儀氏が踏査した際には、山頂部で須恵器、土師器、鉄石英と貞岩の剥片を採集している。しかし中世の遺物は採集されず、須恵器と土師器の時期は 9 世紀前半～中頃という見解を述べている。また西井氏はその踏査の際に山頂下の鉢伏山遺跡推定地内で縄文土器、叩石、チャートの剥片を採集している。今回の踏査ではいずれの遺跡内においても遺物を採集できなかった。

関連する遺跡として、北東側 300m の砺波市地内に須恵器が表採された鉢伏山北遺跡がある。

(21) 第 61 地区（庄地内南側）

庄川右岸、三条山下の狭い平坦地に位置する。標高は 100～145m を測る。地表面は庄川の作用を受けているため、こぶし大の円礫が目立つ。

往時は北側の壇^{だんのじょう}城の城下町が広がっていたと伝わっており、現在も上町^{かんまち}という小字が残っている。今回の踏査では遺物を採集できなかった。壇城により近い雄神発電所、越中庄川莊付近に城下町跡があったと推測する。

(22) 第 62 地区（庄地内南側）

庄川町最高峰牛岳北側、低山性丘陵地および台地に位置する。標高は 94～334m を測る。地表面は丘陵部は泥岩で形成されるが、台地付近は崩積土で覆われている。

台地には周知の遺跡、壇城跡〔遺跡番号 405004〕が広がり、また三条山頂部には千代ヶ様城跡〔ちよがためじょう遺跡番号 405008〕が広がる。

壇城跡は南北朝期に桃井直常が居城としていたが、応安二年（1369）に幕府に直常追討を命じられた二宮次郎左衛門によって攻め落とされた。その後、永正 7 年（1510）には上杉為景が居住し、天正四年（1576）には城主石黒与三右衛門が上杉謙信に攻められ退城したとされている。これまでに昭和 58 年度に試掘調査が実施されており、溝・柱穴・礎石・石敷・石列などの遺構が確認され、遺物包含層からは炭化物が出土した。これは幾度かの落城によるものと推測される。また平成 13 年度には砺波郷土資料館土蔵友の会が中心となって南東側の丘陵部の踏査が行なわれ、土師器一片を採集している。今回の踏査では、047 地点で信楽焼を一片、048 地点で素焼き瓦を一片採集する。

千代ヶ様城跡はその縄張りから南北朝期の山城とみられる。北西の壇城と約 900m 離れているが、尾根伝いの連絡路があり、壇城の詰城として使われていたと考えられている。今回遺物は採集できなかった。

(23) 第 63～64 地区（庄地内東側）

庄川町最高峰牛岳北側、低山性丘陵地間に平坦地に位置する。標高は 120～260m を測る。地表面は丘陵部は泥岩で形成されるが、平坦地は崩積土で覆われている。

以前縄文期の遺物が出土したというが、近年の圃場整備や土取りによって旧地形は失われている。今回の踏査では遺物を採集できなかった。

(24)第 65・71・73・76・80 地区（庄地内西側）

庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は 78～93m を測る。地表面は庄川の作用を受けている。

第 76 地区 083 地点で須恵器の甕を一片採集する。83 地点の須恵器は内外面灰色、胎土は層を成し、白色粒を含む。内面は平行たたき、内面は同心円文が施されている。

(25)第 66・68 地区（庄地内中央）

庄川右岸、下壇と呼ばれる庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置する。標高は 87～94m を測る。地表面は庄川の作用を受けている。

今回の踏査では遺物を採集できなかった。

(26)第 67 地区（庄地内中央）

庄川右岸、上壇と呼ばれる庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置する。標高は 94～120m を測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

雄神神社付近は旧小字を鉄砲町といい、中世には壇城の城下町が広がっていたと考えられる。その後、寛永初年（1624）から元禄十二年（1699）まで山田山光教寺が堂宇を建てており、また寛文三年（1663）には庄川の洪水で社殿が流されたため、雄神神社が現在の位置に移転したという。

平成 13 年度に砺波郷土資料館土蔵友の会が中心となって雄神神社北側の平坦地の踏査が行なわれ、五輪塔および残欠を複数基礎確認している。

調査区は住宅地となっており、今回の踏査では遺物を採集できなかった。

(27)第 69 地区（庄地内中央）

庄川右岸、上壇と呼ばれる庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置する。標高は 91～95m を測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

059 地点で砥石を一点、060 地点で砥石を一点、061 地点で越前焼を一片採集する。061 地点の越前焼は内外面暗褐色、胎土は粗く、白色粒を多く含む。外面は横なで、内面には指頭圧痕が残る。

(28)第 70 地区（庄地内中央）

芹谷野用水を挟んで、芹谷野段丘より一段高い台地に位置する。95～120m を測る。地表面は崩積土で覆われている。

062 地点で須恵器を一片、064 地点で須恵器を一片、065 地点で珠洲焼を二片、古伊万里口辺部を二点、067 地点で中世土師器を六片、069 地点で珠洲系陶器の擂鉢を一片採集する。

台地付近は堂尾どのおと呼ばれ、さらに奥まった場所は岡寺と呼ばれる。北側 400m の位置に恩光寺跡があり、また庄西蓮寺の旧地も付近であったと伝えられており、宗教遺跡の存在を推測させる。

(29)第 72・74・77 地区（庄地内中央）

庄川右岸、下壇と呼ばれる庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置する。標高は 82～87m を測る。地表面は庄川の作用を受けている。

第 72 地区 077 地点で瀬戸美濃口縁部を一点、第 77 地区 086 地点で越中瀬戸焼の擂鉢を一片採集する。

(30)第 75 地区（庄地内北側）

庄川右岸、上壇と呼ばれる庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置する。標高は 91～140m を測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積しており、山手はさらに崩積土が覆っている。

調査区東側の高台に周知の遺跡、恩光寺跡〔遺跡番号 405002〕と隣接して宗半塚〔遺跡番号 405003〕があ

る。

金剛山恩光寺は増山城主神保氏が応永十五年（1408）頃に開祖月桂立乗禪師を招請して、菩提寺として建立した。一時は寺禄が3000歩と隆盛を誇ったが、永正年間（1504～）に一向一揆の兵火にあい、無住となって衰退した。前田利家の越中平定後、増山城に入った中川光重は衰えていた恩光寺に寺禄を寄進し、再興させ、その後恩光寺に退いて巨海斎宗半と号した。そして死後同寺に葬られたと伝わる。承応二年（1653）に再び衰えた恩光寺は福野町に移転した。

今回の踏査では遺跡推定地内で遺物を採集できなかつたが、高台下の能子と呼ばれる場所、079地点で瀬戸美濃を一片採集する。また南側、庄集落の共同墓地内で五輪塔の空風輪を一点確認する。

(31) 第78・79地区（庄地内北側）

庄川右岸、上壇と呼ばれる庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置する。標高は90～136mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

第79地区087地点で珠洲焼の擂鉢を一片採集する。付近から他の遺物が採集できなかつたため、判断がつかない。

第79地区に隣接した高台の頂上部に平成13年度の踏査で発見された金剛寺古墳群〔遺跡番号405017〕がある。また調査区内の一の谷には貫城寺や釈迦堂といった地名が点在しており、宗教遺跡の存在を推測させる。

(32) 第81・84・87地区（三谷地内西側および一部庄地内）

庄川右岸、庄川扇状地扇頂部沖積平野面に位置し、標高は70～75mを測る。地表面は庄川の作用を受けている。

第84地区106地点で中世土師器を一片採集する。

(33) 第82～83地区（三谷地内南側および一部庄地内）

庄川右岸、庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置し、標高は80～120mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

第82地区北西側三谷交差点付近に三谷上野塚〔遺跡番号405016〕がある。塚の頂上部には五輪塔の残欠が残る。付近から遺物は採集できなかつたが、第82地区097地点で越中瀬戸を一片、唐津の塊底部を一点、101地点で砥石を一点、102地点で須恵器を一片、103地点で珠洲焼を一片、土師器を一片採集する。また周辺より砂岩製の石製品片を多数採集する。遺物採集地点はおよそ三谷上野塚から東に100m、北側三谷遺跡から200mの位置にあり、関連が推測される。

(34) 第85地区（三谷地内中央）

三谷川左岸、庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置し、標高は80～89mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

107地点で石造物を一点、108地点で中世土師器の皿口辺部を二点、110地点で中世土師器を一片、111地点で古伊万里の碗を一片、112地点で石造物を一点、113地点で珠洲焼の片口鉢を一点、壺底部を一点採集する。113地点の珠洲焼は珠洲編年第Ⅰあるいは第Ⅱ期とみられる。

採集地点対岸に三谷遺跡が広がり、西側200mには三谷上野塚、東側200mには三谷鉢塚がある。これらの遺跡との関連が推測される。

(35) 第86地区（三谷地内東側）

庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置し、中央を三谷川が流れる。標高は89～100mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

今回の踏査では遺物を採集できなかつた。

(36)第 88 地区（三谷地内北側）

庄川右岸、庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置し、標高は 75～81mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

調査区北側に砺波市地内にまたがって、三谷北遺跡〔遺跡番号 405011〕が広がる。『砺波市史』では安川野武士遺跡B地点と紹介され、弥生土器、須恵器、土師器、珠洲焼、青磁、土師質土器が表採されたとしている。今回の踏査では遺跡推定地内から遺物を採集できなかつたが、推定地外東側 124 地点で石棒を一点、126 地点で唐津底部を一片、127 地点で須恵器の壺を一片、129 地点で珠洲焼の甕を一片採集する。

東側 200mの安川野武士A遺跡とは奈良時代から中世にかけての遺物に共通点が多く、両地点を包括した大きな遺跡である可能性もあるという。

(37)第 89 地区（三谷地内中央）

三谷川左岸、庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置し、標高は 81～100mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

調査区中央に三谷遺跡〔遺跡番号 405009〕が、山側に三谷鉢塚〔遺跡番号 405010〕があり、北西側に西行塚〔遺跡番号 405001〕がある。三谷遺跡からは珠洲焼等の中世土器がこれまで表採されている。鉢塚は明治二十五年に開墾した際に、三基の塚の下から口径一尺深さ二尺余りの瓶が掘り出され、それぞれに鏡三枚、刀一刀、遺骸が納められていたという。なお掘り出された壺は間馬秀夫氏宅と出町真光寺に保管されており、間馬氏のものは珠洲編年第Ⅱ期、真光寺のものは第Ⅲ期と見られる。西行塚は西行・西住の二人が北国への旅の折、西住が故郷三谷村で病によって死んだ。西行は塚を築き骨を埋め、その上に石碑を立て菩提を弔つたという。塚の碑文の判読より元は時宗関係の供養塔であろうといわれる。

今回の踏査では、130 地点で砥石を一点、132 地点で須恵器の鉢口縁部を一点、135 地点で須恵器を一片、八尾焼口辺部を一点、136 地点で古伊万里のとっくり底部を一点、138 地点で土師器を一片、139 地点で須恵器を一片、140 地点で土師器底部を一点、141 地点で土師器を一片、142 地点で石製品を一点、143 地点で珠洲焼を一片、146 地点で越中瀬戸焼の皿底部を一点、古伊万里口辺部を一点採集する。三谷遺跡外の集落北側からも遺物が採集されたため、集落が遺跡の上に乗っていると推測する。

(38)第 90 地区（三谷地内北側）

庄川右岸、庄川河岸段丘芹谷野段丘面に位置し、標高は 75～90mを測る。地表面は礫層の上に腐植洪積土が堆積している。

北東側の安川天皇C遺跡〔遺跡番号 405013〕から縄文前期～中期にかけての土器と凝灰岩・鉄石英・黒曜石の剥片が採集されている。

今回の踏査では遺物を採集できなかつた。

2 まとめ

二ヵ年の調査によって、耕作地を中心として、山間部を除いた庄川町全域 463 地点で遺物を採集したが、約半数にあたる 220 地点が庄川左岸の三段の河岸段丘上であった。これは大河庄川の恩恵を得て、同時に災厄を避けながら、人々が連綿と営みを続けてきた結果であろう。

時代別の採集分布図からもこのことは見て取れる。縄文時代から近世末までの採集遺物の中で最も遡るものは縄文時代前期のものであるが、第3段丘の際から採集されており、それは中期の松原遺跡に続く。松原遺跡の特徴として投網のおもりと考えられる多量の石錐出土が挙げられるが、その立地からも遺跡の性質が伺えられるで

あろう。弥生時代は識別のできる遺物を採集していないため不明であるが、古代になると段丘際よりも湧水利用のためだろうか第2段丘下付近の密度が高くなる。また谷内川流域、東大寺莊園井山庄の北端と考えられる三谷地区からも遺物が採集されている。

中世になるとこの二ヶ所に加えて、種田地区の微高地、庄地区の河岸段丘上の山際、東山見地区の山間部平坦地に人の動きが見られる。これらの場所は性質によって、二種類に分けることができると考える。ひとつは水の得やすい日常の生活の場としての集落である。種田、三谷、金屋の段丘際などがその性質の場所であろう。新たに種田地区に人の動きが見られるのは、庄川の流路の変化のためだろう。もうひとつが水利の必要性が低く、人が近づきがたい非日常の生活の場である城館や寺社である。東山見、金屋や庄の山際などがその性質の場所であると考える。このように性質の分かれていた散布地が、近世になると現在の居住地全域に広がりを見せる。これは庄川の流路がほぼ現在と同じになって以降であるということと無関係ではないだろう。まさに庄川町の人々の営みはその町名のように庄川の流れと共にあったということができよう。

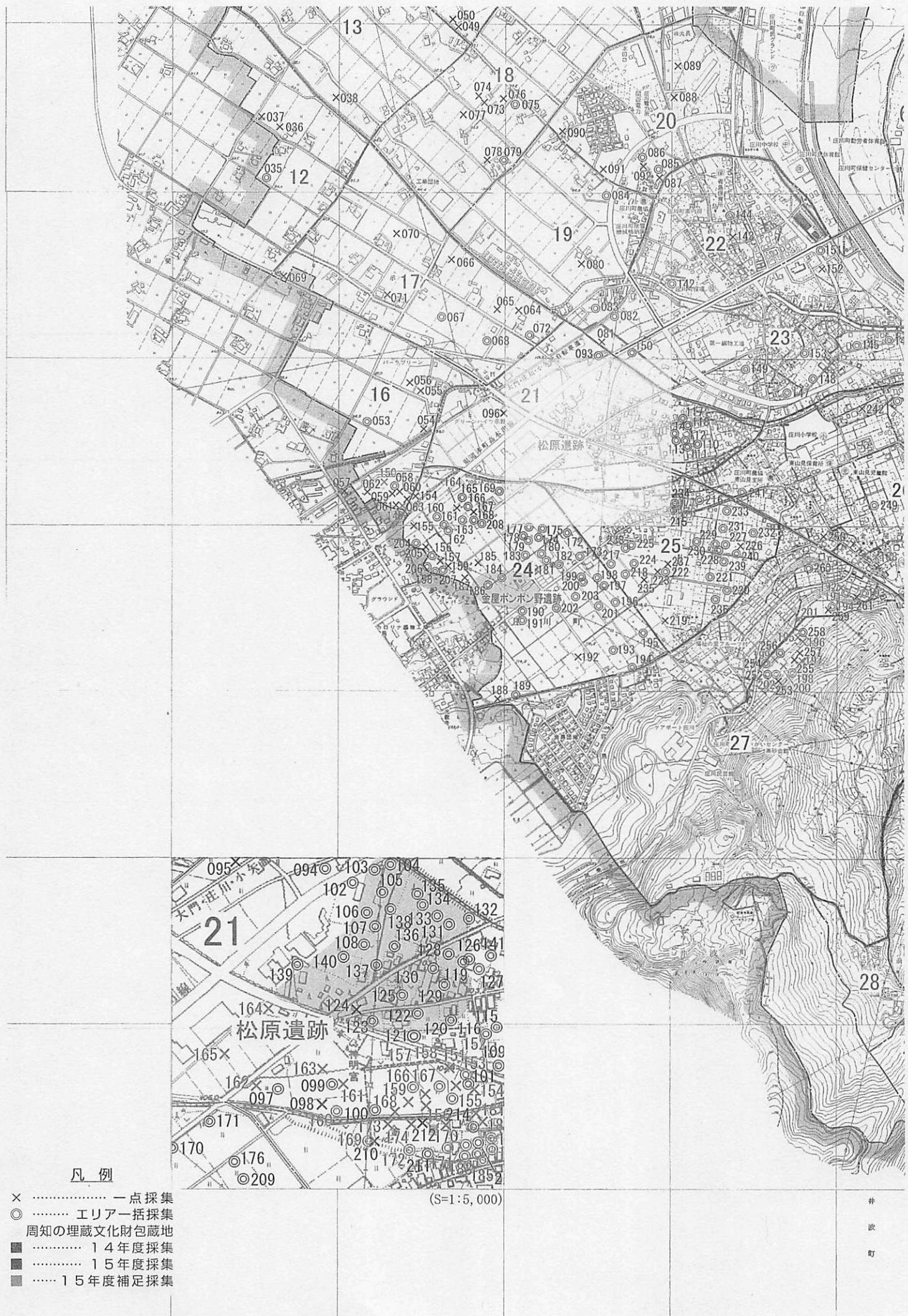
最後に里では圃場整備、山では森林の荒廃によって十分な調査が行なえなかつたことが心残りではあるが、この成果を今後の発掘調査あるいは開発行為の際に活かしてもらえば幸いである。

引用・参考文献

- 井波町史編纂委員会 1970 『井波町史』上巻
岩倉 節郎・上野 章 1985 「井波町犬藪遺跡出土遺物の紹介」『大鏡』9号
榎木 淳一 1979 『村々のおこりと地名（地名のルーツ庄川）』
庄川町史編纂委員会 1975 『庄川町史』
庄川町教育委員会 2001 『富山県庄川町松原遺跡』
庄川町教育委員会 2002 『庄川町雄神山間部埋蔵文化財分布調査中間概報』
庄川町教育委員会・庄川町文化財保護委員会 1983 『壇ノ城跡試掘調査報告書』
庄川町教育委員会・庄川町文化財保護審議会 2004 『富山県庄川町の文化財』
千秋 謙治 1999 『梅原の以速寺』
砺波市史編纂委員会 1990 『砺波市史』資料編1 考古、古代・中世
富山県 1967 『表層地質図 磯波 1:50000』
富山県 1992 『富山県地質図 1:100000』
富山県教育委員会 1975 『富山県庄川町松原遺跡緊急発掘調査概報』
富山県教育委員会 1993 『富山県埋蔵文化財包蔵地地図』
富山県文化振興財団 1996 『梅原胡麻堂遺跡発掘調査報告（遺物編）』
富山県埋蔵文化財センター・庄川町教育委員会 1996 『庄川町松原遺跡調査報告』
西井龍儀 1993 「鉢伏山山頂付近の表採遺物」『土蔵』6号
畠 六次郎 1923 『雄神村誌』
東山見村役場 1946 『東山見村史料』



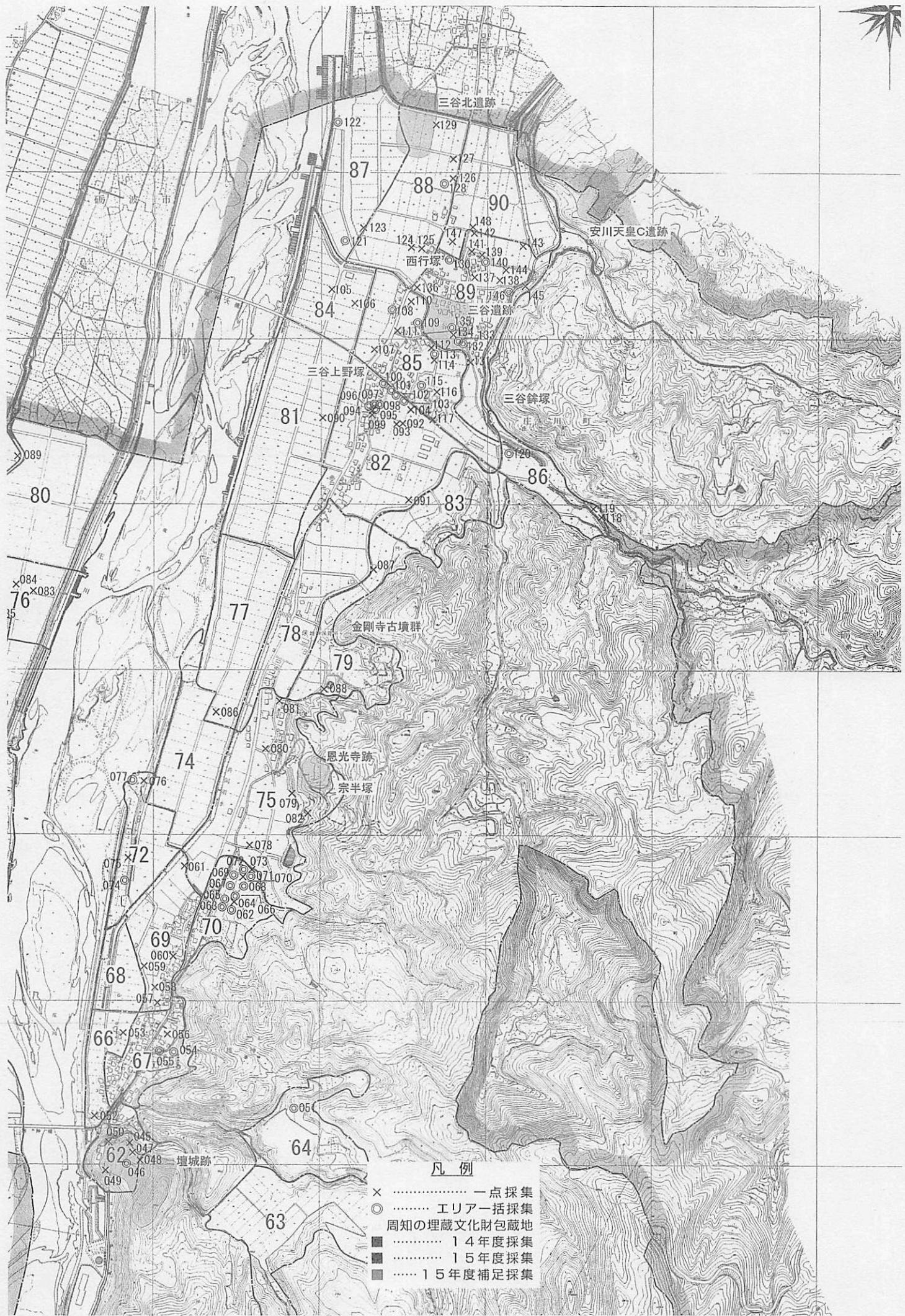
第4-1図 遺物採集地点詳細図1 (S=1:10,000)



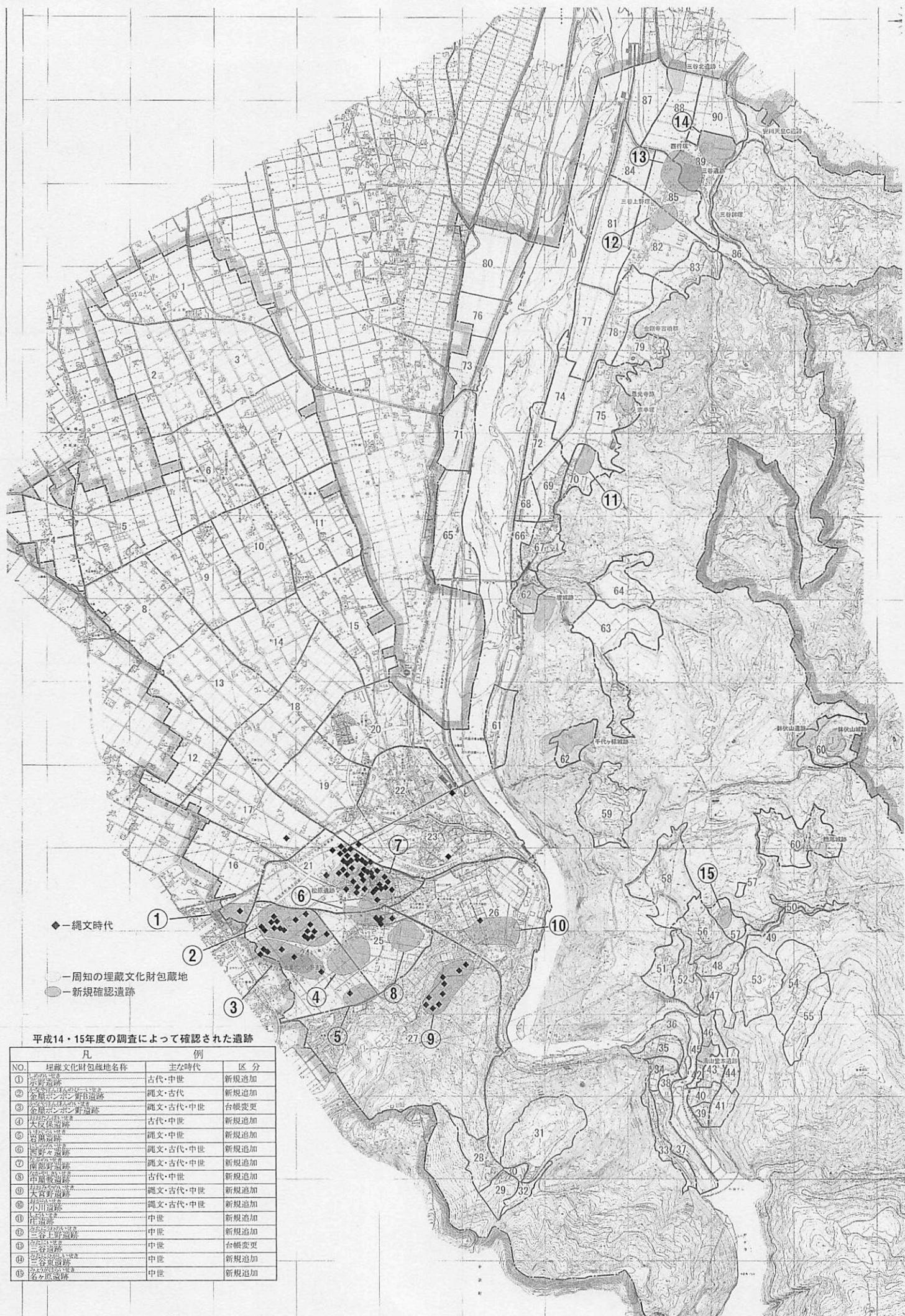
第4-2図 遺物採集地点詳細図2 (S=1:10,000)



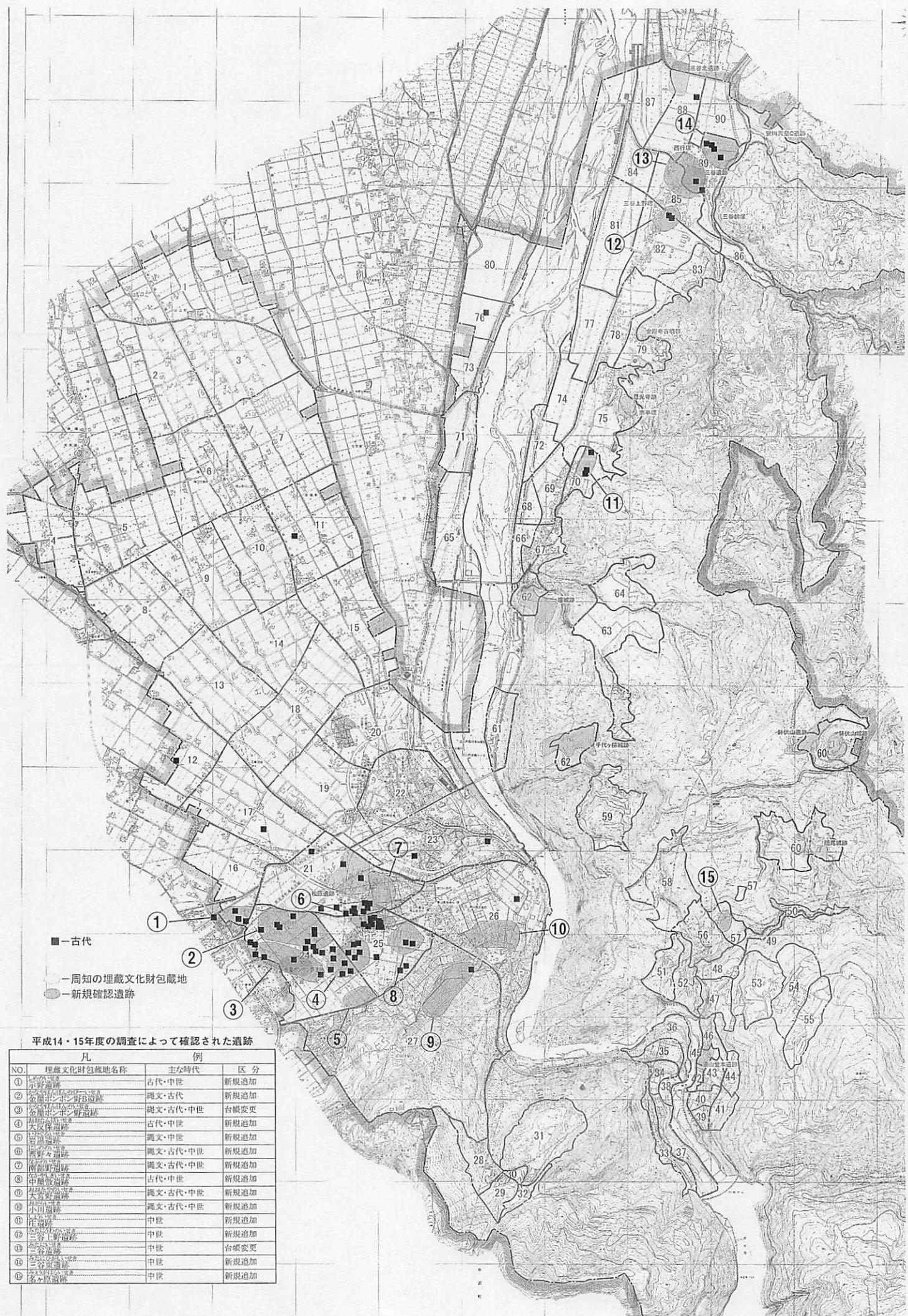
第4-3図 遺物採取地点詳細図3 (S=1:10,000)



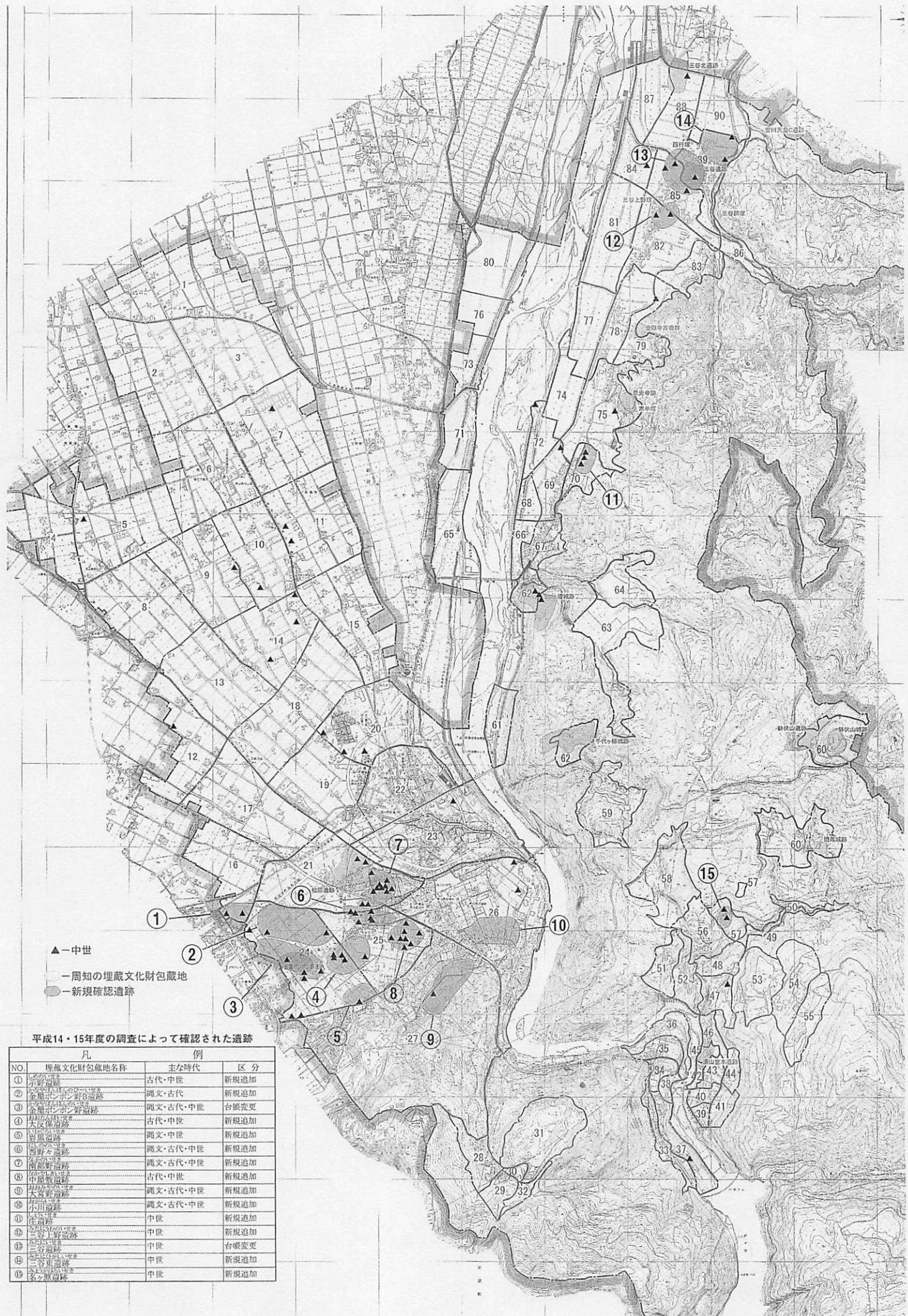
第4-4図 遺物採集地点詳細図4 (S=1:10,000)



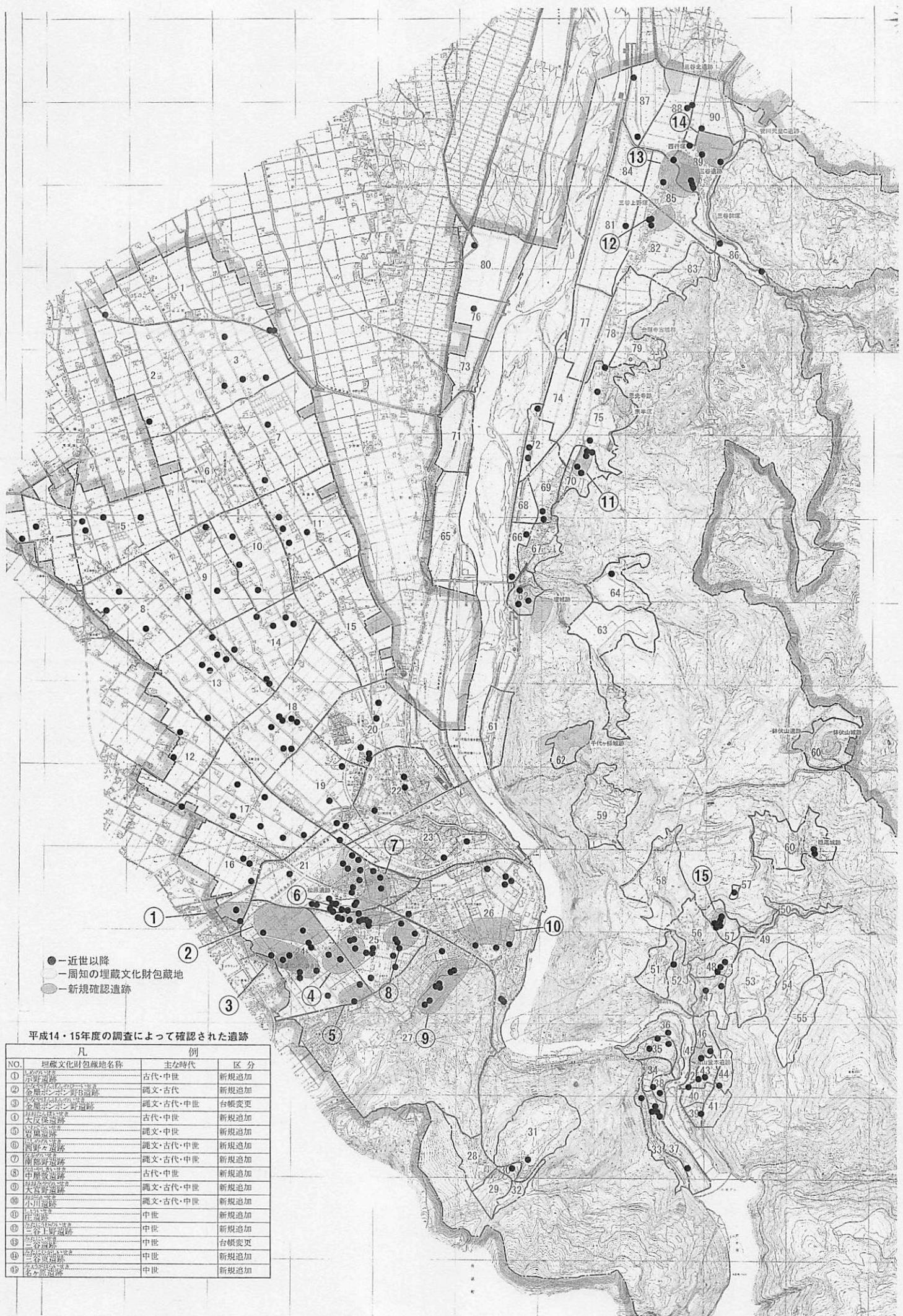
第5-1図 時期別採集地点図（縄文時代）(S=1:20,000)



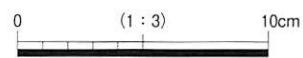
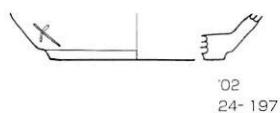
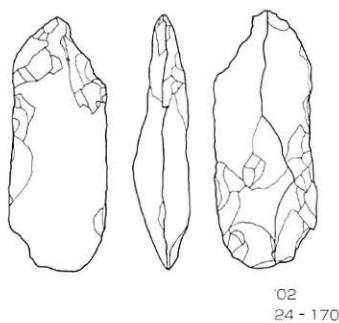
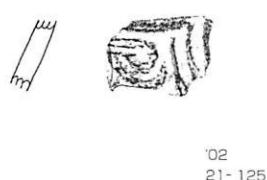
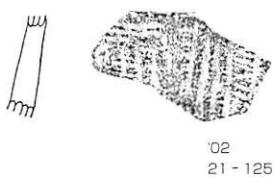
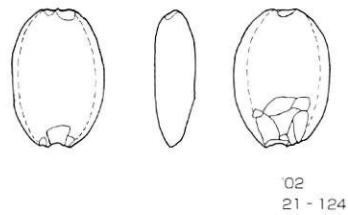
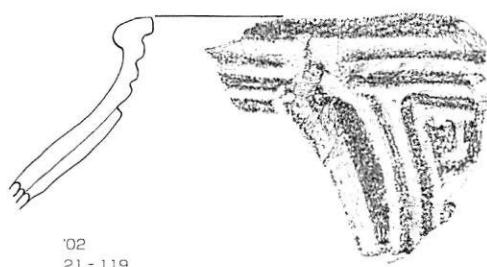
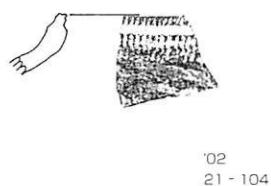
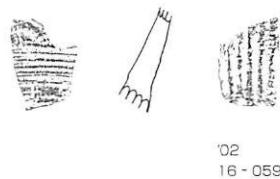
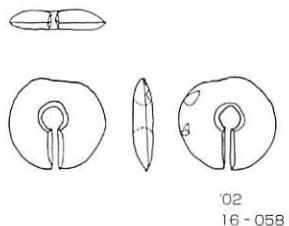
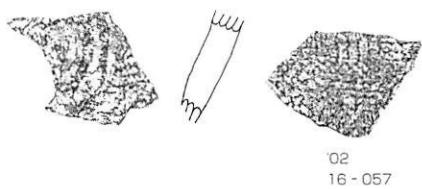
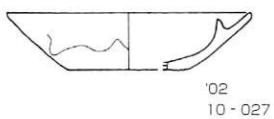
第5-2図 時期別採集地点図(古代) (S=1:20,000)



第5-3図 時期別採集地点図(中世) (S=1:20,000)

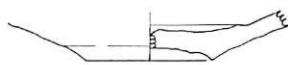


第5-4図 時期別採集地点図（近世以降）(S=1:20,000)





'03
57 - 034



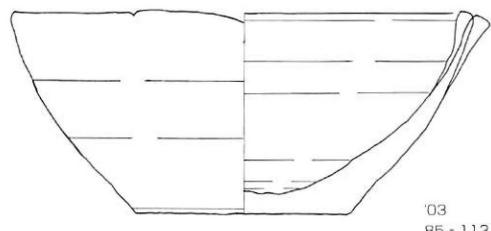
'03
59 - 036



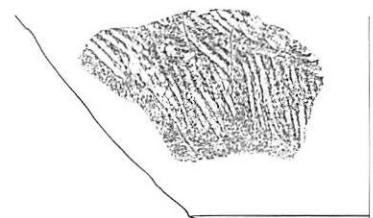
'03
82 - 102



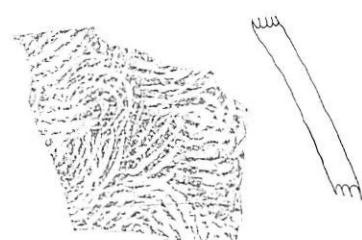
'03
85 - 103



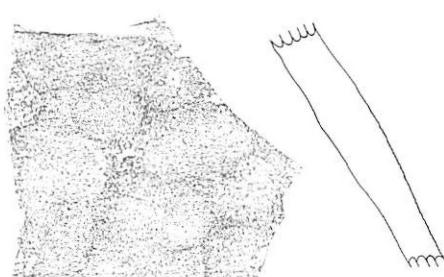
'03
85 - 113



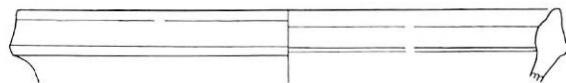
'03
85 - 113



'03
88 - 127



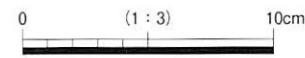
'03
88 - 129



'03
89 - 135

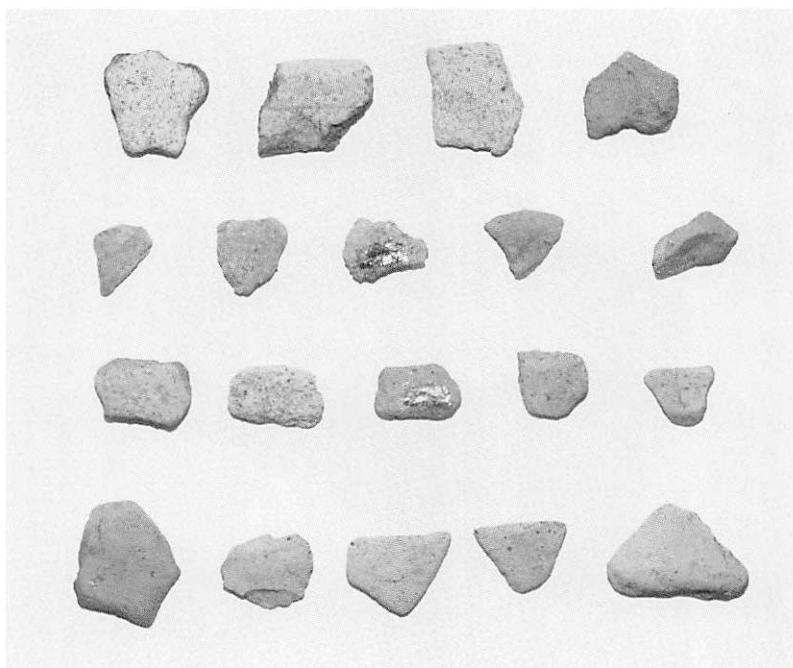


'03
89 - 143

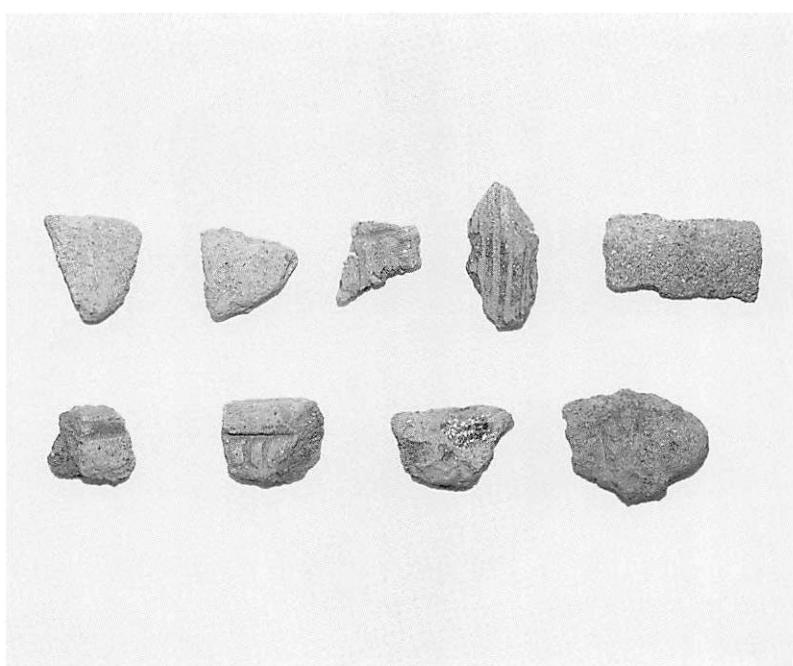




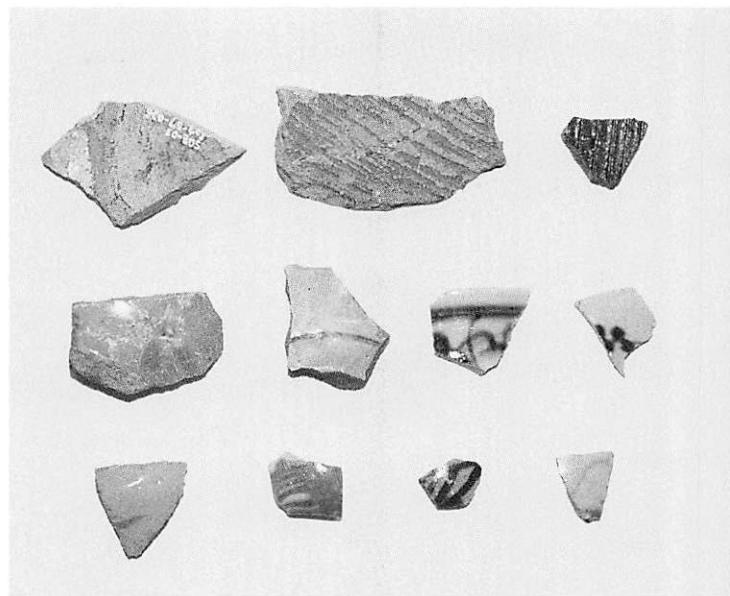
第 16 地区 珠状耳飾



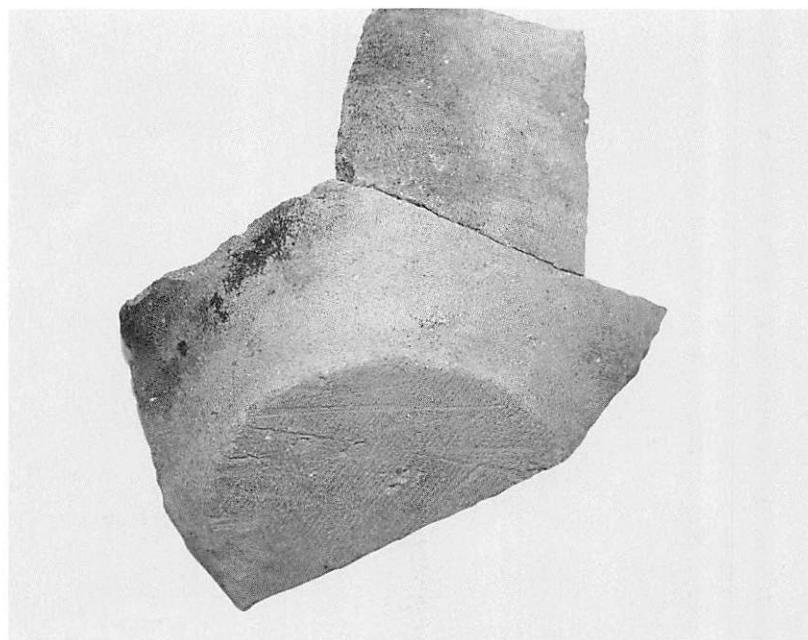
第 21 地区 中世土師器



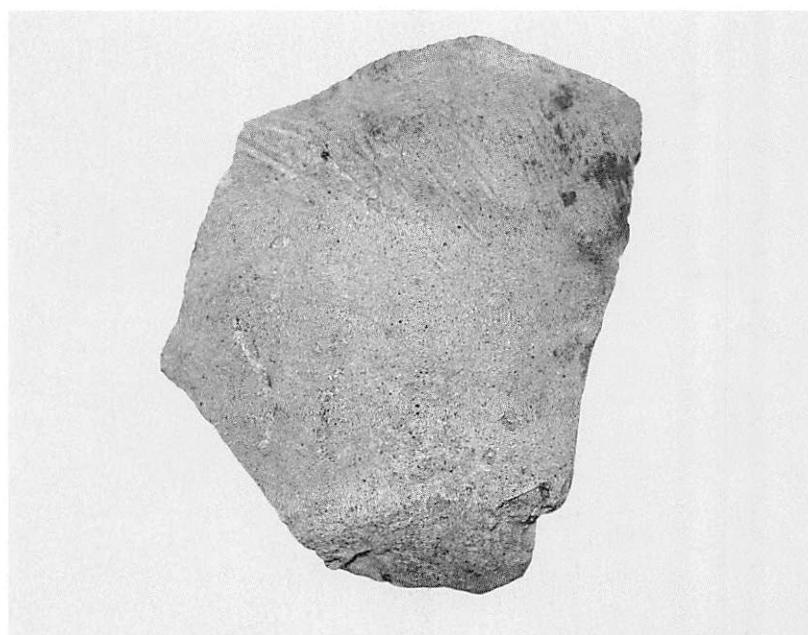
第 27 地区 縄文土器



第 57 地区 中世～近世陶磁器



第 85 地区 珠州焼



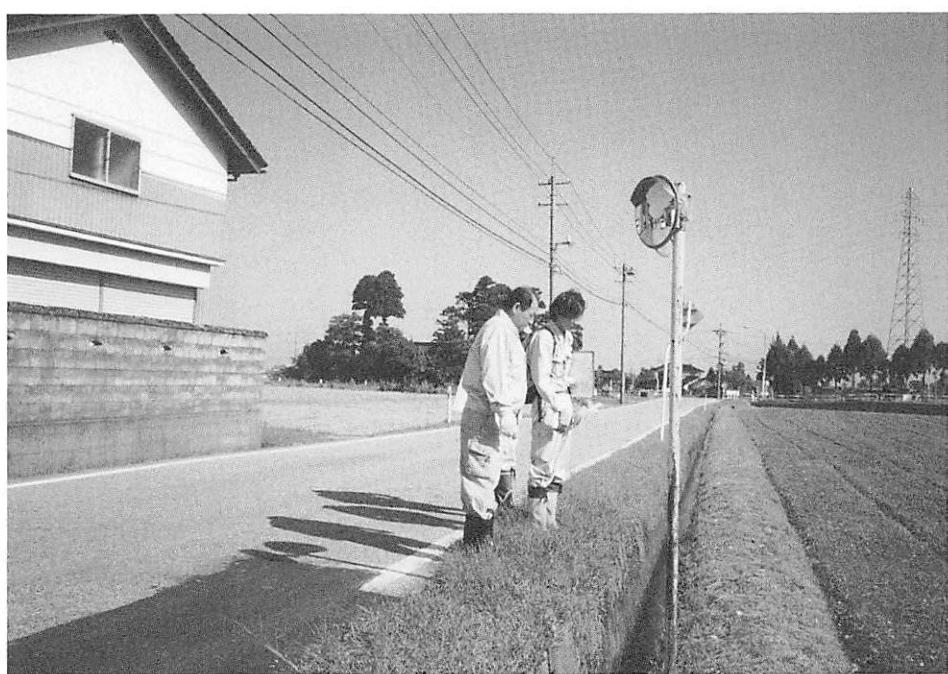
第 85 地区 珠州焼



調査風景（14年度）



調査風景（14年度）



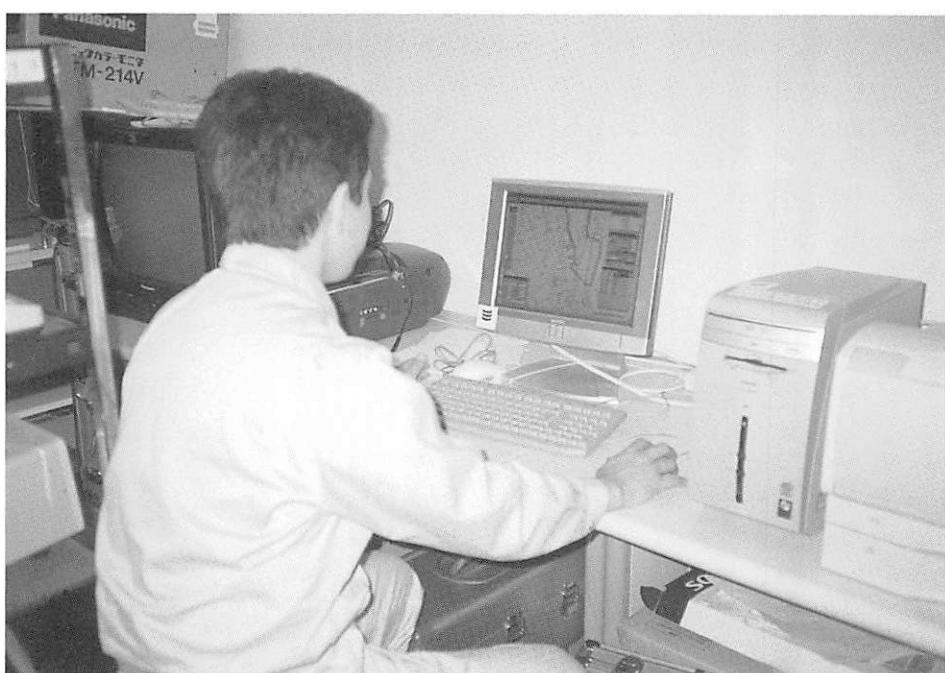
聞きとり風景（14年度）



調査風景（15年度）



洗浄作業



編集風景

報告書抄録

書名	富山県 庄川町埋蔵文化財分布調査報告							
編集者名	大高崎泰明							
編集機関	庄川町教育委員会教務課							
所在地	〒932-0314 富山県東砺波郡庄川町青島3607 電話(0763)82-5007(代)							
発行機関	庄川町教育委員会教務課							
所在地	〒932-0314 富山県東砺波郡庄川町青島3607 電話(0763)82-5007(代)							
発行年月日	西暦2004年9月1日							
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
町内遺跡	富山県 東砺波郡 庄川町 地内	16405	*	36度 34分 40秒	136度 59分 20秒	H14.9.20 H15.3.25 H15.6. 5 H16.3.25	*	*
所収遺跡名	種別	主な時期	主な遺構	主な遺物			特記事項	
町内遺跡	*	縄文 古代 中世	*	縄文土器 珠洲焼	須恵器 ほか		*	

庄川町埋蔵文化財分布調査報告

平成16年 9月1日

発行・編集 庄川町教育委員会